

平成 2 年度

幼児期における安全指導についての一考察

川崎市総合教育センター 幼児教育長期研修員

幼児期における安全指導についての一考察

石田町子¹

キーワード：幼児教育 幼稚園 5歳児 安全指導

はじめに

生まれたばかりの乳児には100%の保護が必要である。しかし、成長するにつれて保護され守られるだけでなく、自ら気づいたり体得したりする事も必要であろう。幼児期の安全行動についても同様の事がいえるのではないだろうか。安全行動は、成長とともに発達し備わっていくのであるが、就学という自立の時を前にした5・6歳児の時期に遊びや生活を通し、幼児が必要感をもって気づいたり考えたり行動したりしながら安全意識の芽生えを培い将来的にも安全な社会生活を送っていくとする態度を育てたいと考える。

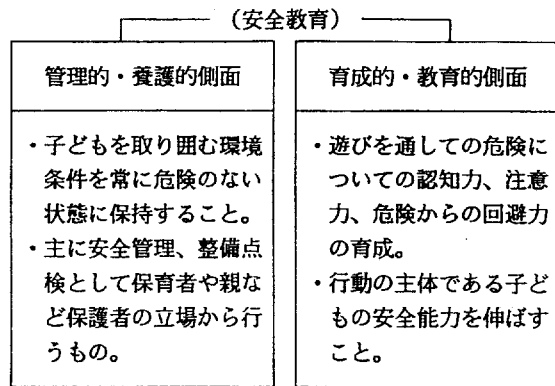
I 主題設定の理由

幼児の生活は遊び中心であることから、生活が遊びと一体化しているといえる。幼児は一日の幼稚園生活のほとんどを、自分の興味や関心の度合いによって様々に行動し活動しながら、経験を積み重ね、知的好奇心や探究心、冒険心、運動能力、心情等を養っていく。この度の教育要領改訂では、幼児の自発的、主体的な生活を重視し、促していく事が強調されている。幼児自身が展開する遊びの時間を今まで以上に保障し、幼児の自発的、能動的な活動を充実させていこうとしているのである。そこでは幼児自身の自由な発想での遊びが充実する一方で、安全に対する教師の配慮とともに幼児自身の安全意識も更に高められる必要があると思う。安全教育の方法は大きく分けて下図の2つの側面が考えられる。これらは常

に一体となり展開されなければならない。また、子どもが幼ければ幼いほど管理的養護的側面が重要で加齢とともに育成的教育的側面の比重が大きくなる。しかし、幼稚園等の集団生活が始まり行動範囲も拡大する幼児期において、この両者のバランスが最も困難な時期となる。¹⁾

このことから、幼児の安全能力や安全意識は、幼いからといって親や教師から危険と安全の判断を教えられて育つだけ

だけでなく、日常の生活や遊びを通して体験的に身につけ、確かなものとして培われるであろうことへの期待を強くした。そこで、本主題を定め、幼児期の安全指導についての実態をとらえ、幼児の安全能力や安全意識を培う手立てを探ってみることにした。



川崎市立白幡台小学校附属幼稚園教諭（幼稚園長期研修員）

小林芳文「子どもの遊び その指導理論」光生館 1984年 78, 79ページ参照

Ⅱ 研究のねらい

1. 幼児期の安全指導について幼稚園、家庭、地域の実態をとらえる。
2. 日常生活や遊びの中で幼児の安全能力や安全意識を培う手立てを探り考察する。

Ⅲ 研究の方法

1. 研究の仮説
 幼児の安全能力や安全意識は、
 - (1) 幼児自身の体験を通して身につく確かなものとして培われる。
 - (2) 危険に対する許容範囲を広くした環境の中で培われる。
 - (3) 幼児をとりまく大人が安全に対し積極的な認識をもち幼児に接する事により培われる。
2. 研究の方法
 - ・ 幼児の安全に関する親の意識調査実施
 - ・ 地域の交通安全指導を見学
 - ・ 他園参観をし保育での安全の配慮を観察
 - ・ 安全指導に関する研修会参加
 - ・ 文献研究

Ⅳ 研究内容および考察

1. 幼児の安全に関するアンケート調査を実施し、親の安全についての意識を把握する。
 - (1) 調査目的
 幼児期においては家庭の役割や影響は大きい。安全について親がどのような意識をもっているかを把握する事は安全指導の望ましい在り方を探る上で有意義であると考えた。
 - (2) 調査対象・調査期間・回収状況

対象 (7園)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 住宅地にある園(1) ・ 交通量の多い地域にある園(2) ・ 集合住宅が多い住宅地にある園(1) ・ 商店街のある住宅地にある園(2) ・ 商店街や集合住宅があり交通量も多い地宅地にある園(1) 上記幼稚園の保護者361人対象	<ul style="list-style-type: none"> ・ 調査期間 平成2年10月上旬 ・ 回収299(82.8%) 有効数294
------------	---	---

- (3) 調査表の構成 (○内は項目数)
 - ・ 属性に関して⑨
 - ・ 遊びの実態②
 - ・ けがの実態②
 - ・ けがに対する親の考え方②
 - ・ 遊びに対する親の許容度⑤
 - ・ 子どもの性格行動に関して①
 - ・ 安全のルールやマナーに関する自由記述①
 - ・ 不慮の事故災害の備えに関する自由記述①
 - ・ 安全健全に関する自由記述①
- (4) 調査結果および考察
 - ① 親は多少のけがに対して、全体的に許容的である。
 - ② けがに対する親の考え方には、全体的に行動を抑制しないという姿勢が伺えた。(図1・2)
 - ③ ①②の結果をもとに「子どもの性格・行動」を分析してみた。親の「性格や行動のとりえ方」は、子どもの性別によって

図1 けがの頻度

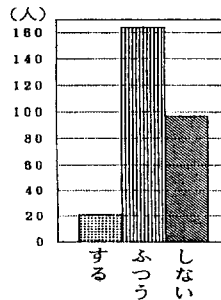
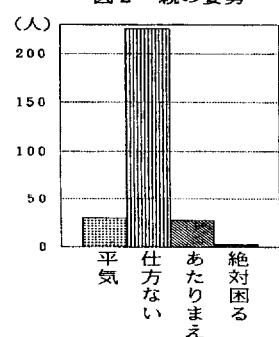
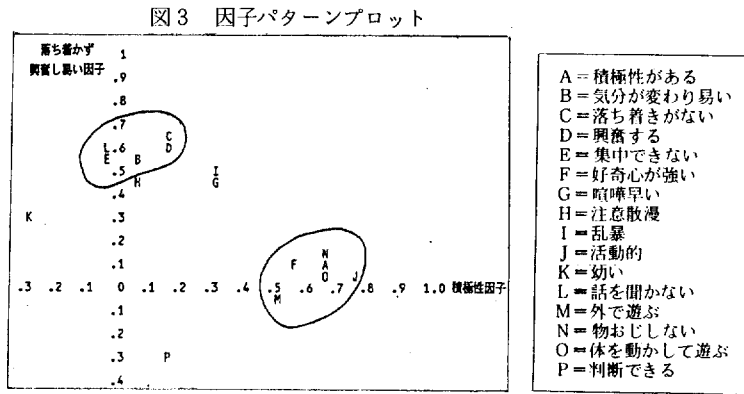


図2 親の姿勢



多少違う。また、けがを許容する姿勢にも子の性別が影響する事が予測された。そこで「子どもの性格・行動」を因子分析したところ「積極性、落ち着かず興奮し易い」の2因子を抽出できた。

(図3) 各々を「高・中・低」群の3群に分け考察した。



幼児のけがの原因は全般に「不注意」である。(55.3%) しかし、積極性の高い男児では「自転車乗り」の時に多く、(30.3%) 低い男児は「かけっこ」の時に多い。(26.5%) 積極的な子は自転車乗りという技術を要した遊びをする事が多いが、積極性の低い子ではそういう事が少ない為だろうと思われる。また、積極的な女児では「自転車乗り(10.0%) かけっこ(13.3%)」でのけがは他の群より少ない。親も、子どものけがはしかたないとした受け入れの姿勢を示し、積極性の低い子の親は、けがを否定しないまでも受け入れるには消極的である。落ち着かず興奮し易い子は、「不注意(69.0%) 段差(13.8%)」によるけがが多く「自転車乗り」では少なくなっている。親は全体的に、あたりまえとの受けとめ方をしており、男児の親は、「平気・あたりまえ」との思いをもつが女児の方は「平気」の回答はない。

上記の結果から、積極性の高い子ほど遊びの中で活発に体をよく動かしけがもするが、体験的に危険の回避も身についていくといえ、親も受け入れの姿勢を示している。落ち着かず興奮し易い子は、気持ちに不安定さがあり、遊びへの興味も深まらないため不注意のけがが一層多くなる。親は全体的に、あたりまえとの受けとめ方をしているものの「男児には好ましく思っても、女児は心配という場合がある」という親のおもいが伺えた。しかし、全体的には、子どもの発達を促す程度の多少のけがは、子どもの活動性や活発さを示すものと考えられており、体験を通して子どもの自立を促そうとする配慮が伺えた。

④ 子ども自身が自分の安全を自分で確保する為に、親として安全教育を家庭で行おうとする者は多い。(図4・5)

しかし、子どもをとりまく物理的環境や社会的環境の変化が、子どもの安全教育を一家庭で行う事を難しくしているのも現状である。そのため親が地域社会や幼児教育の場に、安全教育を高める為の要望を行うのは当然の事と思われる。親、家庭が果たす役割と、地域の環境の安全性の整備との境を見極めた上で、双方の協力や協調が大切だと思う。

図4 家庭の安全指導の姿勢

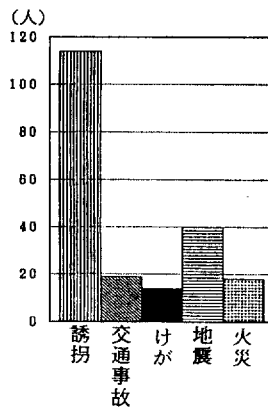
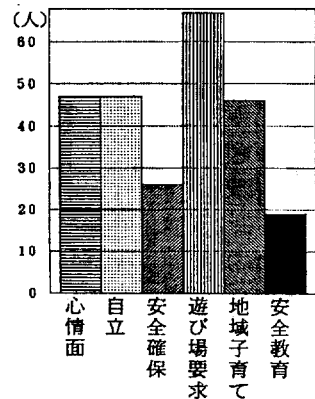


図5 子の安全、健全な育ちへの希望



2. 地域での安全に関わる指導・配慮の実際を見学する【交通安全母の会、交通安全教室】

特に交通安全指導の実態を見た中で「子どもはいつでも大人を見ている」という事や、大人達が様々な意味あいから子どもに対し良い手本を示そうとする意識をもっているかどうかが問われているのではないかと、といった印象をもった。

3. 自由活動の活発な幼稚園等を参観し保育の中の安全への配慮点を探る【幼稚園，保育園】

幼児は環境によって育つ。環境として安全への配慮もなされるはずである。他園の例で得られた事は、安全管理は幼児が遊ぶ上で必要な事であるが、更に重要な事は事故を多くしないような環境への配慮をし、保育者が危険に対する許容度を高くもつ事として共通していた点である。また、幼児の心身を自由に解放し、遊べる力をつけるという事も共通しており、興味深いものであった。

V まとめと今後の課題

幼児自身が体験の中で「こんなふうにして遊ぶとけがをする」「こんな事に気をつけよう」というような、自ら必要感をもった安全意識の芽生えとでもいえるところを大切にしたい。大人が注意を払い過ぎたり環境を作り過ぎたりしては、幼児が本来発揮しようとする安全に対する意識や意欲をかえて阻害する事になりかねない。幼児期の安全指導についてアンケート調査をし、地域の実態を探り、他園参観を行った中で効果的な手立てとして次のような確認を得た。

- ・様々な面で幼児の自立や自覚が促せるように働きかけたり意識をもったりする事
- ・禁止しなくてもよい環境（人的・物的）をつくる事により危険に対する許容範囲を広げる事
- ・その時々にあった手本を大人が具体的に示す事
- ・幼児自身が日常生活の中で友達と接し自由に体や心を動かして遊び、心身への体験を多くもつ事
- ・自然な営みの中でおしつけではない優しさや思いやりを育む事

そして、このような事が相互に作用しあって、幼児の自発的能動的な活動を誘発し充実させていくことができ、これが更に幼児自身の危険回避や安全能力の芽生えを培う上でも有意義な事となるのではないだろうか。

今後は、得られたいくつかの資料や考察を自分の保育実践の中で生かし、幼児の安全意識の芽生えや高まりを見極めていきたいと思う。

おわりに

今回の自主研究では様々な体験や学習ができた。特にアンケートのデータを読む過程では物事を客観的にみるという貴重な学習を通して、その事の難しさとともに大切さを痛感した。

この1年間総合教育センターで勉強させていただいた事に感謝するとともに、いろいろな場でご指導、ご助言いただきました諸先生方に心よりお礼申し上げます。

・参考文献

詫間晋平 『安全教育の基礎と展開』	ぎょうせい	1978年
永野重史・依田 明 『子どもの世界』	新 曜 社	1985年
藤原藤祐 『教育研究のための調査票の設計と事例』	ぎょうせい	1976年
平井信義・豊田君夫 『よみがえれ 自由保育』	明 治 図 書	1988年
松岡 弘・小村欣司 『子どもの事故防止』	ぎょうせい	1984年
全国国立幼稚園長会「幼稚園じほう — 1月号」		1991年

・指導助言者

横浜国立大学助教授	岡田 守弘	川崎市総合教育センター研修指導主事	木村寿子
川崎市総合教育センター指導主事	佐々木賢司	川崎市総合教育センター研修指導主事	森 美代